

出土物が語る音の世界—漢代説唱俑の魅力—

説唱俑とは

前回紹介した漢代の芸芸は現代にも通用する高度なものであった。そのなかには、言葉を使って人を喜ばせる芸もすでに存在していた。以前から筆者が関心をもっていた後漢の墓からの出土俑についてここで述べてみたい。それは鼓をかかえた愛嬌のある男性俑である。中国音楽研究のバイブルともいえる楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』（人民音楽出版社、1981年）に、「説唱は漢代にはすでに相当普及していた民間芸術であり、『漢書』卷六八の「霍光伝」に「鼓を撃ち歌唱するを俳優と作す」とあるように、四川から出土した説唱俑がこの語の生きた証といえるだろう」（124頁）とある。四川の説唱俑は、中国古代の民間説唱芸人の代表的な形象とされているのである。



『中国音楽文物大系 四川卷』（大象出版社、1996年、207頁）によると、「俑の高さは56cm、太短い身体つき、頭巾をかぶり、笄かみどめをつけ、上半身は裸で、両肩を高くいからせ、垂れた胸、太鼓のような大きな腹、両腕には玉飾りの装飾をつけ、角ばった長ズボンをはき、はだしで、丸い椅子に座っている。左腕には小鼓を抱え、右手を挙げ、口をあけて笑い、からかうような姿をしている。この俑は、おどけた表情、おおげさな動作で、見事に塑像されている。これは四川で出土した俳優俑のなかでも圧巻である」とある。

修海林・王子初『看得見の音楽 楽器』（上海文芸出版社、2001年、116頁）には、この俑について以下のように解説がある。

「成都の天回山の説唱俑は1957年に四川の成都天回山三号崖墓の石棺から出土した。この崖墓では、石棺一具と瓦棺十二具が出土した。石棺の四壁には朱雀・伏羲・女媧・日月星辰や庖厨（台所）などが彫刻されていた。出土したさまざまな道具のなかで、鉄刀に金象嵌で「光和七年」（184年）と銘文があった。副葬品は陶器が主であり、陶製品で家畜・建物・井戸・使用人や生活用品など生活内容や環境などの諸方面が再現されており、楽器もその一部分である。陶製楽器のなかでは、琴が一件、ほかに説唱俑・排簫俑・撫琴俑・吹竽俑・舞踏俑など十二件があった。この説唱俑は丸い椅子に座って演技した。楽器を演奏する者と並んで舞人と説唱を行う者が、権力者の娯楽のために侍っていた。

俳優とは

いままでも述べてきたが、ここで整理しておく、この説唱俑は、「俳優」という職業の元祖である。日本人がいう俳優とは異なり、戯言ざれごとを言って人を楽しませるものを称した。今の日本のお笑い芸人に近いのかもしれない。俳とは、『説文解字』人部に「俳は戯なり」とある。その段玉裁だんぎょくさいの注では、「其の戯を以て之を言わば之を俳と謂う、其の音楽を以て之を言わば之を倡と謂う、亦た之を優と謂う、其の実一物なり（以其戯言之謂之俳、以其音楽言之謂之倡、亦謂之優、其実一物也）」と、つまるところ俳も倡も優も、人を楽しませる点では同じで、俳も優も同義と考えていい。『史記』滑稽列伝には、俳優の優旃ゆうせんについて、「優旃なる者は、秦倡侏儒なり、善く笑語を為し、然して大道に合す（優旃者、秦倡侏儒也、善為笑語、然合於大道）」とある。別の俳優の注（索隱）には、「案ずるに、優は、倡優なり……旃は其の字のみ、……旃は秦に在る者なり（案、優者、倡優也……旃其字耳、……旃在秦者也）」とある。この侏儒とは、小人のこびとことをいう。この

戯言を用いて人を楽しませる俳優は、小人であることもあったらしい。時には自分の身体的特徴も利用して、権力者を戯言で楽しませるのが俳優であったのだろう。四川の有名な説唱俑（『中国音楽文物大系 四川卷』（208頁）の画像をもう一つあげてみたい。

1963年に四川の郫縣宋家林の後漢の墓から出土した高さ66.5cmのこの説唱俑について、李建民『中国古代理遊藝史』（東大図書公司、1993年、170頁）には、「歪んだ口、曲がった両足、奇形の身体つきが冗談ばい表情と重なり、とても生きいきとしている」とある。顔をしかめて、自分の身体の短所をさらけ出し、可笑しみを演出し、いきいきと当時の様を今に伝えてくれる。漢代の四川



上に紹介した説唱俑二体は、後漢のものというだけでなく、四川の成都付近からの出土という共通点もある。そこには豊かな文化的営みがあったことを、これらの出土物は語ってくれる。

蜀と呼ばれた四川西部からは、漢代に著名な文化人が多く輩出した。『文選』（巻4）に収録された左思さし「蜀都の賦」では、蜀の文化程度の高さを誇り、前漢の武帝に辞賦の才を見出され、宮廷文学の方向を決定づけたとされる司馬相如しほしやうじよ（B.C.179?～B.C.117?）や、学者・思想家としても知られる揚雄ようゆう（B.C.53～A.D.18）の名が挙がる。しかし、前漢よりも後漢において、さらに文化的発展がみられた。中林史朗『中国中世四川地方史論集』（勉誠出版、2015年）に、益州出身者が中央政界における一勢力へと成長して来ると述べられている（107頁）。益州とは漢代におかれた州名で、蜀と同地域を指すが、権力者の都への往来を通じて都の文化が益州にも多くもたらされたことは十分推測可能である。漢代の四川の音楽文化も、都のそれに倣うとすると、綱渡りなどの演技や動物戯なども含む「百戯」や俳優文化が流入していたことは納得できる。先の説唱俑が出土した成都天回山三号崖墓は、岷江沿いの崖に作られた墓で、崖墓という埋葬形式は四川にとりわけ多いものだという。川沿いの険しい崖に作られたのは如何なる階級の者の墓か知る由もないが、説唱俑のほかにも、排簫俑・撫琴俑・吹竽俑・舞踏俑など十二件が出土していることからして、都の文化にも精通した文化人の墓だったと推測される。

説唱俑の魅力

説唱俑はなぜ鼓を抱えていたのであろうか。吉川良和『中国音楽と芸能』（創文社、2003年）第7章「説唱音楽」には、現代の説唱者について、説唱は、「聴衆にテンポやリズムの変化をつけることで、より深い味わいと厭きさせない工夫をしている」（256頁）とある。また、説唱者は必ず打楽器を手にする（259頁）という。打楽器のリズムにのせた戯言の、その調子のよさに魅了される人間の感覚は、古今東西共通しているのかもしれない。蘇州の評談のような現代の説唱者は、ほかの楽器演奏者に伴奏をさせることもあるが、先の説唱俑とともに楽器を奏する楽人俑が出土したことから、漢代でも他楽器の伴奏をまじえた賑やかな説唱が行われていたようである。このいきいきとした後漢の説唱俑は、鼓のリズムによって調子よく物語る芸人の息吹を感じさせてくれると同時に、もしかしたら漢代の芸能文化も今とさして変わらぬものだったかもしれないとの想像を我々に抱かせる。